

外国語学部主催, アジア・太平洋研究センター共催講演会

日 時：2009年11月27日（金）

場 所：名古屋キャンパス G棟1階 G21教室

報告者：宮城大蔵（上智大学准教授）

テーマ：「海のアジア」と日本



「海のアジア」とは？

- 1) 第二次世界大戦後
- 2) バンドン会議（アジア・アフリカ会議）
- 3) 「北京＝ジャカルタ枢軸」
- 4) 「開発の時代」の到来
- 5) アジア通貨危機
- 6) 東アジア共同体

戦後のアジア政治は、日本、「大陸のアジア」ともいえる中国、「海域のアジア」を代表するインドネシア、この3国の絡みを見ることでその本筋が見えてくる。二国間関係、あるいは“点”と“点”で見るのではなく、「面」で国際関係を見てみたい。

戦前のアジアに主権国家は極めて少なく、「国際政治」は存在しなかったと言える。しかし、第二次大戦が終わるとアジアには「独立」の時代が到来した。中国は国共内戦を経て、1949年「革命」による統一を果たした。同じ年、インドネシアは4年にわたる反植民地主義闘争を経て、独立を果たした。一方、連合軍の占領下に置かれた日本は、1952年に独立を回復した。日本はアジアにおけるアメリカの緊密なパートナーとなるが、反対に中国はアメリカの「封じ込め」政策にあう。

1955年のバンドン会議は、欧米諸国が関与しない初めての国際会議であった。第二次世界大戦後に独立を果たして主権国家となった国々が、反植民地主義、相互の連帯を掲げて一堂に会した。インドネシアのスカルノ、中国の周恩来、インドのネルーと新興国の“顔”が注目を浴びた。会議に招待された日本は、アメリカと良好な関係を保ちつつ、アジアへの復帰を果たすことを目指し、政治ではなく経済でアジアを結びつけようとした。日本の代表として派遣されたのは、国際的な知名度は低いが経済専門家の高碇達之助だった。

中国は革命を追求し続け、階級闘争を対外関係にも反映させたが、それは文化大革命で先鋭化した。インドネシアも独立完成をめざし、オランダ領として残された西イリアンを併合するために戦った。それが終わると、今度はイギリスに支援されて独立したマレーシアと敵対した。ともに「既成勢力」と戦う中国とインドネシアは接近し、「新興勢力」による「第二国連」の創設をめざして、インドネシアは国連を脱退した。欧米からの援助を断ち切られてインドネシアが国際社会で孤立する中、日本は賠償で築いたインドネシアと対話のできる関係を保ち、スカルノの強硬路線を押し止めようと説得する側に回った。

しかし、1965年にインドネシアで起きた9・30事件は、インドネシアの内政外交を大きく変えたのみならず、アジアの歴史にとっても大きな転換点となった。スカルノは権力の座をスハルトに奪われ、国家の追求する目標も独立から「開発」へと変わった。インドネシアはマレーシアとも和解し、ASEANが誕生した。東南アジア諸国の脱植民地化の時代は終焉し、日本に後事を託すようにイギリスも東南アジアから退場した。中国でも文化大革命が終息し、ベトナム戦争に行き詰まったアメリカは、それを打開するために中国と接近した。自力更生から外資を取り込む政策に転じた中国は「改革開放」へと向かう。日本は援助で開発への趨勢を後押しした。ここに日本を中心にしたアジアの「開発の時代」が訪れ、それは1980年代に頂点に達する。

この構図が崩れるきっかけとなったのは1997年のアジア通貨危機である。インドネシアでは開発体制が崩壊してスハルトは退陣を余儀なくされ、ASEANは混迷・弱体化した。一方、国際金融にそれほど巻き込まれていなかった中国はこの危機を回避し、経済発展とともに存在感が巨大化した。日本では東南アジアへの関心が薄れるとともに、中国を過剰に意識する傾向が強まり、「中国脅威論」まで出てきた。

日本外交の隠れたポイントは中国と東南アジアのバランスを取ることであったが、現在の日本は中国ノイローゼのようにその圧迫感におしつぶされている。インドネシアはG20の主要メンバーであり、民主主義を達成した世界最大のムスリム人口を擁する国として重要になってきていることを忘れてはならない。崩されたバランスを回復する必要がある。

同時に、日本の安全保障体制がアメリカとの二国間同盟で成り立っている一方、経

済ではアジア域内の一体化が進んでいるという「ズレ」が今後大きな問題になる可能性がある。

(文責：小林寧子)